

第26回 郷土先賢室顕彰者紹介



「Norin10」で世界を食料危機から救った農学者

稲塚 権次郎 (1897~1988)

稲塚権次郎は、明治30年(1897)2月24日、東砺波郡藁谷村(現南砺市城端地域)西明に、農家であった父竹次郎と母こうの長男として生まれた。幼少より頭脳明晰、勉強に熱心で、尋常高等小学校高等科1年(今の小学5年生)の頃には英語を学び、学芸会で「ワシントンと桜の木」を英語で演説した。明治44年(1911)、県立農学校(現県立南砺福野高等学校)に進学、3年間を首席で通した。卒業後は、小学校の代用教員をしながら家業に励んだ。そうした中、農学校での担任堀口宣治からダーウィンの「進化論」を借りた権次郎は、この本の虜になってしまう。

遺伝や品種改良に興味をもつようになった権次郎は、堀口の勧めに進学を決意、両親や農学校教師らの励ましで準備に取り組み、大正4年(1915)、東京帝国大学農科大学(現東京大学農学部)農学実科に入学した。そこで外山亀太郎教授のもとで蚕の遺伝の研究に励んだ。この体験が後の品種改良の基になる。

大正7年(1918)卒業、農商務省に入省するも、召集により金沢の連隊に約1年間入隊。復帰後の大正9年(1920)、農事試験場陸羽支場(現秋田県大仙市大曲)に赴任し、水稻の品種改良に本格的に取り組み始めた。権次郎は、別品種との交配により各々の長所を引き出し育成する交雑育種法を用い、前任者から引き継いだ「陸羽132号」を「森田早稲」と交配させて新品種を育成した。これが新潟県農事試験場に引き継がれて「水稻農林1号」として全国に普及し、やがて「コシヒカリ」や「ササニシキ」が生まれる基となった。

大正15年(1926)、権次郎は岩手県農事試験場に赴任し、小麦の品種改良に取り組んだ。昭和4年(1929)、新品種「小麦農林1号・2号」の育成に成功、昭和13年(1938)までに8種類の新品種を作出した。その中で昭和10年(1935)に登録されたのが「小麦農林10号(Norin10)」である。寒さに強く生長が早く、穂が大きく穂数が多いにもかかわらず背丈が低いために倒れにくいという特長をもつ品種であった。戦後、この種子はアメリカに渡り、さらにメキシコで小麦の研究をしていたN・E・ボーローグ博士の手に渡り、メキシコ的小麦との交配により、従来2~3倍の収量も可能となる品種が幾種類も作出された。これらがインドやパキスタンなど、数多くの国々に広がり、それぞれの国土に適した品種が作出された。こうして1960年代、「緑の革命」と呼ばれる運動が広がり、世界の多くの人々を飢餓から救うこととなった。

権次郎は、昭和13年(1938)に中国の華北産業科学研究所に赴任し、「小麦華農1号」を開発した。帰国後の、昭和23年(1948)、農林省金沢農地事務局に赴任し、河北瀋干拓計画などの開発計画を指導した。昭和32年(1957)、定年退官すると故郷に戻り、西明地区の農業基盤整備拡充事業に尽力するなど、一貫して農業の向上に尽くした。昭和46年(1971)、「小麦農林10号」育成の功により勲三等瑞宝章を受章。昭和56年(1981)10月、金沢で開催された日本育種学会でボーローグ博士と初対面し、感謝を伝えられた。

昭和63年(1988)12月7日早朝、家の前の農地溝脇に倒れ、91年の生涯を閉じた。

平成28年度も引き続き顕彰される郷土先賢者



黒部西瓜の品種改良と流水客土の実現に力を尽くした農業技術者

伊東 森作 (1897~1997)

明治30年(1897)に下新川郡大布施村(現黒部市大布施)に生まれる。

大正後期、売れない黒部西瓜の品種改良に取り組み、昭和13年(1938)、ようやく病気に強い「新黒部西瓜七号」の開発に成功した。

昭和14年(1939)から郡農会(現農協)技師となった森作は、黒部川扇状地特有の砂質浅耕土と冷水のかけ流しの改善のため「流水客土」を考えた。しかし、自分の立場に限界を感じると、県議会議員として事業化に一途に取り組んだ。昭和26年(1951)、日本初の流水客土が県営事業として着手された。効果は括目に値した。農民の生活をよくしたいとの信念を貫いた生涯であった。